

2022年8月7日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「福音は神の力」

聖書：詩編85:9～14、ローマの信徒への手紙1:16～17

ドイツの牧師ボンヘッファー著『告白教会と世界教会』—「教会と諸民族の世界」(1934-35年)から教えられたい。この時代は1年前にヒトラーが政権を取り、徐々に軍事力を強化している時代でドイツがポーランドへ侵攻する4年前のこと。

ボンヘッファーは詩編の言葉を掲げる。「わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように」(詩85:9)この詩編は、世界の教会に神の平和が語られている。諸々の民族を越えて、教会は平和を語らなければならないし、戦争を止めなければならない、教会はそのことが神から託されている。また、福音書にある「地には平和」(ルカ2:14)を用いて、キリストの到来によって与えられた「平和」に対して、教会は二通りの態度を表していると言う。一つは無条件に、ひたすら服従の行為をもって歩む教会。もう一つは、「神は本当にそう言われたのか？」と蛇のように疑問を投げかける教会(蛇とは、創世記3章に出て来るアダムとエバをそそのかす蛇のこと)。蛇のように疑問を呈して、「平和」について向き合わない教会のこと。

ボンヘッファーは、「平和は存在すべきである。なぜならキリストがこの世界にいまし給うのであるから。すなわち、キリストの教会が存在するゆえに、平和は存在すべきである。」本来あるべき教会とはそういうことであると。しばしば混同されるのは、「平和」と「安全」を同一のものと考え、身の安全から平和を考えて行くことをしてしまう。しかし、「平和」と「安全」は別のものである。ボンヘッファーは「安全の道を通って平和に至る道は存在しない。何故なら、平和は敢えて、なされねばならないことであり、一つの偉大な冒険であるからだ。それは決して安全保障の道ではない。平和は安全保障の反対である。安全を求めるということは、相手に対する不信感を抱いているということだ。そしてこの不信感が、ふたたび戦争を引き起こすのだ。安全を求めるということは、自分自身を守りたいということである。平和とは、全く神の戒めにすべてをゆだねて、安全を求めないということ」。

ロシア・プーチン大統領の不安からか「安全」という名のもとの戦争を始めている。日本も「安全」という事から、敵基地攻撃を正当化する。中国の台湾有事が取りざたされる中で尖閣諸島の有事だとあおり、日本政府は「安全」確保のゆえと自衛隊による軍備強化が離島各地で急ピッチで推し進められている。今、そういう情勢の中で、教会は何を優先し何を神から問われていると聞くのか？神の言葉、神の力である福音を、私たちが恥としないキリスト者の歩みを心に留めたい。(神谷)